

令和4年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立加茂農林高等学校 学校番号 37

I 自己評価

<p>1 学校教育目標</p>	<p>校訓「至誠勤労・質実剛健」及びスローガン「いのちを育み そして いのちから学ぶ」の下、夢の実現を目指す生徒一人ひとりの良いところを見つけ、励まし支える教育を推進し、広い視野と高い志をもって地域社会に貢献できる人材を育成する。</p> <p>【教育方針】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 人や自然を愛する豊かな情操、次代を生き抜く健やかな心身を育てる。 2 確かな学力とコミュニケーション能力を身に付け、自他の課題に主体的に挑戦する力を育てる。 3 産業人として必要な素養を身に付け、地域社会や産業界に貢献できる人材を育てる。 		
<p>2 スクール・ポリシー</p>	<p>『育てたい生徒像』 グロデュエーション・ポリシー (GP)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思いやりと協働の精神を培い、自らの役割と責任を果たせる生徒 ・確かな学力とコミュニケーション能力を身に付け、自ら学び、自ら考え行動し、主体的かつ協働的に課題を解決していける生徒 ・産業人として必要な豊かな人間性を育み、地域社会や産業界に貢献できる生徒 	<p>『生徒をどう育てるか』 カリキュラム・ポリシー (CP)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践的・体験的な学習活動を通して学び、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人としての資質・能力を育成 ・主体的・対話的で深い学びを実践するプロジェクト学習により、科学的な思考力・判断力・表現力を養い、課題解決能力と実践力を育成 ・生徒一人ひとりの個性や長所を十分に伸ばす、個に応じた細かな指導の実施 	<p>『どんな生徒を待っているか』 アドミッション・ポリシー (AP)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植物や動物を育てること、食や環境など本校の学習内容に興味・関心がある生徒 ・実験・実習などの実践的・体験的な学習に、意欲的に取り組める生徒 ・将来、食料供給・環境創造などの各分野について大学等で学習を深めたり、農業や関連産業で地域貢献しようとする生徒

3 評価する領域・分野	◇学校運営	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	①よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念のもと、「社会に開かれた教育課程」の作成が求められている。 ②第3次教育ビジョンの重点項目「ふるさと教育」と「ICT環境の活用」の5カ年計画の5年目の実践として成果が求められている。 ③法改正により教員の働き方「時間外勤務時間月45時間、年360時間」が注目されている。	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	①「社会に開かれた教育課程」の作成 ②「加茂農林で学べてよかった」と思わせる教科・生徒・進路の各指導 ③時間外勤務時間の短縮の啓発と事後検証による改善を目指す。	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	①校内の各分掌等において具現化し実施する。 ②学校運営協議会における意見・アドバイスを活用する。	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
①学びの3要素を明確に示した授業改善を通し、確かな学力を身につけさせる。 ②ICT等を活用した授業の実施と研究授業による活用方法の研究を行う。 ③時間外勤務の軽減。	①学校評価アンケート「教員、学習指導」における評価の上昇 ②学校運営協議会での指導・意見 ③時間外勤務時間とストレスチェックの結果	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①学びの3要素を明確に示した授業改善を通し、確かな学力を身につけさせる授業改善 ②ICT等を活用した授業の開発・採点システムの利用 ③勤務の割振、8の日、早帰りの日を意識した時間外勤務の軽減と正確・正直な勤次郎の打刻	①学校評価アンケートの教職員、学習指導に関する項目の評価 ②校内研修、教育委員会の研修への参加 ③割振の実施状況と勤次郎による勤務状況の把握	A (B) C D A (B) C D A (B) C D
12 成果課題	・多くの教職員が協働し、ICT等を活用した授業、採点システムの利用が確実に進んだ。さらに発展させるために合理的な蓄積方法が必要となる。 ・業務アシスタント、農場支援員、特別支援教育支援員の導入により確実に業務軽減と効率化が進んでいる。さらに業務の合理的分担が必要となる。 ・オンラインの活用は進んだが、新型コロナウイルス感染予防対策による制限がある中、生徒の学校における学びの様子を見てもらう機会を作ることができなかった。	総合評価 A (B) C D
13 来年度に向けての改善方策案		
・新教育課程の適切な実施。カリキュラムマネジメント、「PDCAサイクル」の構築を進める。 ・県が進める働き方改革、時間外勤務時間の短縮に向けた取り組みを推進する。 ・新型コロナウイルス感染症感染予防に取組ながら、ICTの活用を含めて、学校生活を保護者に見てもらう機会を作るなど、開かれた学校運営を推進する。		

3 評価する領域・分野	◇教務部	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	令和3年度学校アンケートより ・「授業などで一人一人の能力に応じた指導を行っている。」あまりあてはまらない以下が11%→授業改善が必要である。 ・「テストの点数だけでなくいろいろな面から学習の評価を行っている。」あまりあてはまらない以下が13%→観点別評価の実施など評価方法の見直しが必要である。	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	1. ICT環境の活用と「わかる授業」の実施。 (1) 公開・研究授業の実施と職員研修による授業の改善活動。 (2) チームで取り組み、授業規律の確立を目指す。 2. 観点別評価の実施に伴い、職員研修の設定など評価方法の改善を図る。	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	授業を軸に、各部との連携を図り、チームで規律を確立する。外部組織への積極的な研修活動(総合教育センター、企業)	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 職員研修や研究・公開授業の実施 (2) 授業規律のルール提示と定着を図る (3) ICT機器の活用から授業改善を図る (4) 観点別評価に係る研修の実施	(1) 職員の意識(参観率)と生徒の評価(授業アンケート)は向上したか。 (2) 各分掌・担任と連携し、授業規律の定着を図る指導を行うことができているか。めいわく調査の結果は改善されたか。 (3) ICT機器を活用した授業が行われたか。 (4) 評価に係る研修の機会を設けたか。	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
①職員研修と公開授業の実施とその参加率 ②守るべき授業規律は生徒に浸透しているか ③ICT機器の授業への積極的な活用 ④観点別評価に係る研修の実施	①研修の実施・参観の感想の収集 ②各分掌・担任と連携し、心のアンケートなどの結果を参照 ③ICTを利用した授業改善は行われているか。 ④観点別評価に係る研修が実施されたか。	A B C D A B C D A B C D A B C D
12 成果課題	総合評価	
○観点別評価の研修を行い、実際に評価方法に取り入れることができた。 ○校内限定ではあるが、公開授業週間を2回計画し実施することができた ○ManabaやMetamojiなど、通常の授業で多く取り入れられている。ICTを利用した授業に対して肯定的な意見が10%向上した(学校評価アンケートより) ○教育相談で授業内での迷惑行為に関する相談がなく、落ち着いて授業に向かう姿勢が定着し、昨年よりも授業規律が確立している。 ▲タブレットの破損の報告が多く、生徒一人一人の意識向上が必要である。 ▲参加する機会が減ったため、保護者の学校活動について認知が低い。	A B C D	
13 来年度に向けての改善方策案	・来年度も「授業改善」に力を入れ、引き続きICTを活用した「わかる授業づくり」を推進していく。 ・観点別評価に関しては、更に研究をし、指導と評価の一体化を図っていく。 ・保護者に対して学校行事や教育内容を積極的に広報、参加を促し認知度を上げる。	

3 領域・分野	◇生徒指導部	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	昨年度の問題行動は7件、自転車事故が12件であった。自転車事故は生命に関わる事故は起きていないが前年の3倍となった。年間欠席者数約1230人、遅刻者数が約430人と令和2年度とほぼ同数であった。	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	<p>「豊かな人間関係を築き、地域社会人として考え行動し、自らの夢に挑戦できる姿」の具現に向け、継続的な生活指導を図る。</p> <p>①命を守り生活を守る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通安全の徹底（道路交通法を厳守する） ・生活安全の徹底（スマホ・ネットの使い方・情報モラル） <p>②生徒の自立を促す生徒指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的自立：元気な挨拶・時間を守る・身なりを整える ・精神的自立：物事の善悪を判断できる・思いやりの心・高い人権意識 	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	学科・学年会との連携及び教育相談組織の活用	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
① いじめ・人権に反する行動を見逃さない。規範意識の向上と問題行動の未然防止に取り組む。	① 「いじめはどの学校でも、どの子にも起こり得る」と認識し、危機感を持って未然防止・対応に組織的に取り組む。問題行動事案件数5件以下	
② 挨拶を中心とした生徒の自主的な活動。	② 生徒会・MSリーダーズ等を中心とした活動と取り組み状況が活発になっているか。	
③ 交通ルールの遵守を徹底させ、自転車等の安全運転を身につけさせる。	③ 交通事故件数0を目指す。	
④ 教育相談を機能させ、生徒個人および集団のよりよい学校生活を実現させる。（SCの活用）	④ 教育相談の存在が充分広報できたか。	
⑤ スマホ、ネットなどの情報モラルの徹底。	⑤ 情報モラル違反事案0を目指す	
⑥ 社会的自立を目指し、基本的な生活習慣を確立させる。	⑥ 欠席総計（600以下）遅刻総計（200以下）昨年の半数 清楚な身だしなみでの学校生活	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
① いじめ調査、めいわく調査の結果	① 問題行動事案件数	A (B) C D
② アンケート等を活用して生徒状況の把握	② 調査の実施と活用	A (B) C D
③ 各講話・講習の実施と街頭指導	③ 交通事故件数	A (B) C D
④ SCを活用し、学校生活に不安を感じる生徒の早期発見と支援体制作り	④ 不登校者数、カウンセリングの実施状況	A (B) C D
⑤ 情報モラル講話の実施と学校内での自主規制	⑤ 情報モラル違反件数	(A) B C D
⑥ 遅刻指導の実施	⑥ 欠席、遅刻者数の調査	A B (C) D
12 成果課題	<p>①問題行動:2件（家出）いじめ事案:2件（うち重大事態1件）</p> <p>②心のアンケート:毎月、授業規律アンケート:2回、いじめアンケート:3回</p> <p>③交通事故:13件（対物10件、自損3件）</p> <p>④欠席30日以上の子生徒:5人（うち転退学者4人）</p> <p>⑤情報モラル違反:1件</p> <p>⑥欠席者数:1942人、遅刻者数:330人</p> <p>いじめが原因による不登校・転学により、いじめ重大事態が発生した。これ以外にも生徒間トラブルが多発し、未然防止や問題解決の難しさを感じた。欠席者数が激増したが、出席停止の規準や報告書の提出状況に課題を感じた。</p>	
13 来年度に向けての改善方策	<p>近年、生徒指導上の問題行動は年々減少しているが、人間関係のトラブルや学校生活に不安を抱える生徒が増加している。今後は生徒支援を中心に分掌の取り組みを進めていく必要性を感じる。そのため令和6年度をめどに、生徒指導部から生徒支援部への変更を視野に入れ、令和5年度は生徒支援部の役割と目標について教職員および在校生への周知と理解を進めていく年にしたいと考えている。</p>	

3	評価する領域・分野	◇進路指導部			
4	現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	学科試験が行われない就職先、総合型選抜入試等で早期に安易に進路先を決めてしまう生徒がいる。高い能力を持ちながら、早期から具体的な進路目標を持たないため、受験準備が遅れ成果に結びつかない例がある。			
5	今年度の具体的かつ明確な重点目標	<p>「社会的・職業的な自立に必要な能力や態度」を育てるために、キャリア教育を踏まえた進路指導の充実を図る。</p> <p>①あらゆる機会を通して、基礎学力を確実に身に付けさせる。</p> <p>②主体的で意欲ある進路活動に結びつかせるための「選抜ポイント」意識させ、将来の自分の姿を具体的に思い描かせる指導や機会を設ける。</p> <p>③配置されたタブレットを利用した進路指導を工夫する。</p>			
6	重点目標を達成するための校内における組織体制	学年会、学科、各分掌と連携して実施する。			
7	目標の達成に必要な具体的な取組	8	達成度の判断・判定基準あるいは指標		
<p>①あらゆる機会を通して、基礎学力を身に付けることの重要性を認識させる。(全学年)</p> <p>②個々に応じた具体的な進路目標を持たせるために、将来の自分の姿を具体的に思い描かせる機会を設定する。(1年生)</p> <p>③学年末には具体的な進路目標を持たせることができるようにする。(2年生)</p> <p>④個々に応じた進路指導を充実させ、安易な進路を選択することのないよう努める。(3年生)</p> <p>⑤挨拶や言葉遣いの指導を通して、進路決定における「挨拶」の重要性を意識させる。</p>		<p>①個別の進学指導、SPI学習会、面接指導等を成果に結びつけることができたか。</p> <p>②到達目標を明確にし、進路に関する思考・表現活動に働きかけたか。</p> <p>③「選抜ポイント」を意識させながら、より具体的な進路目標を持たせることができたか。</p> <p>④適性、学力、家庭環境など様々な観点から判断し最も望ましい進路選択をさせることができたか。</p> <p>⑤昨年度より挨拶ができる生徒が増加しているか。</p>			
9	取組状況・実践内容等	10	評価視点	11	評価
<ul style="list-style-type: none"> 基礎学力を身に付けさせる取り組み、個別の学習指導が行われたか 個々に応じた進路指導がなされ、適切なアドバイスをを行うことができたか 「挨拶」の重要性の意識付けを行えたか 		<ul style="list-style-type: none"> 小テストと到達度テストへの変更が行われた。 概ね望ましい進路選択をさせることができた。 学校全体で取り組めた 		<p>A ○ B C D</p> <p>A ○ B C D</p> <p>A ○ B C D</p>	
12	<p>就職では、企業開拓と3年担任・科長・進路指導部職員により企業見学や新規企業開拓などを行い、適切な就職指導ができたと考えている。公務員に5名が合格し、うち3名が国家公務員(宮内庁、国交省、自衛隊)に合格した。</p> <p>進学では、国立大学に2名受合格した。個別の進学指導を行ったが、希望する進学先の不合格者も若干おり、目標意識を早くから高く持たせ早期学習指導が必要と考えている。</p> <p>全体としては、概ね希望する進路決定ができたと考えている。</p>			<p>総合評価</p> <p>A ○ B C D</p>	
13	<p>来年度に向けての改善方策案</p> <p>国立大受験者に対する指導体制の強化充実。企業開拓と受験指導。看護専門学校受験者への指導の充実</p>				

3 評価する領域・分野	◇農場部	
4 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・本校に入学できて良かったと思っている生徒が多く、本校の専門の学習への興味関心が高い生徒が多い。特に今年度は入試での倍率も高く優秀な生徒獲得できた。 ・保護者の本校の農業教育に対する理解も高く、好意的な評価をしていただいている。 	
5 今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・実験実習の安全 実習環境の改善 ・専門学習の充実 プロジェクト活動の活性化と資格取得指導の計画的実施 ・難関大学への進学率を徐々に上げていく 	
6 重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・学科長を中心として各学科（学科職員全員）で取り組む。 ・農場組織の農場安全教育部の活動を推進し、農業科職員全員で連携を図る。 ・進路指導部や普通科と学科が連携を図る。 	
7 目標の達成に必要な具体的な取組	8 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
<ul style="list-style-type: none"> (1) 危険個所と事故防止策の確認 (2) 備品・薬品管理の徹底 (3) 地域や外部と連携したプロジェクト活動 (4) 進路指導、普通科、学科が連携した進路指導の確立 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 実験実習中の安全指導について見直しと改善が図れたか (2) 備品と薬品の管理は適正にできたか (3) プロジェクト活動が地域や外部と積極的に連携して実施できたか (4) 進路指導組織の確立と運営ができたか 	
9 取組状況・実践内容等	10 評価視点	11 評価
<ul style="list-style-type: none"> ①事故防止向けの定期的な注意喚起、安全マニュアルの更新 ②備品台帳の整備、薬品簿の記載と管理、不要薬品廃棄 ③各科におけるプロジェクト活動の推進と積極的な地域連携 ④計画的な資格取得指導、四年制大学進学へ向けての進路指導 	<ul style="list-style-type: none"> ①実験実習における怪我や事故の有無 ②備品と薬品の管理状況確認 ③地域連携活動の効果と内容についての検証 ④資格取得率、大学合格率 	<ul style="list-style-type: none"> A B C D A B C D A B C D A B C D
12 成果課題	総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> ・実験実習が安全に行えるよう定期的に注意喚起をしたが、怪我の発生を無くすことができなかった。発生した怪我の状況の情報共有を行い、更なる防止に努めたい。 ・不要な薬品はおおかた処分できたが、備品についてはまだ進んでいない。 ・コロナの規制がかなり緩和され、各科で積極的に取り組めた。昨年度に続き全国大会に出場できた。 ・国立大学合格者が2名出たが、全員の希望を叶えることはできなかった。 	A B C D	
13 後期に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・事故・怪我を無くす事ができるように、注意喚起を含め引き続き取り組んでいきたい。 ・不要備品を引き続き処分し、備品の整理を順次行いたい。 ・国立大学進学者向けの指導体制を構築し、進学者数増加を目指す。 	

学校関係者評価

実施年月日：令和5年1月26日

【意見・要望・評価等】

- ・先生方には心の通う良い指導をしていただいている。生徒は人との接し方、心の通わせ方を学んでいる。人によって進路は異なるが、人が生きる基礎を作っていただきたい。生涯の糧になる。
- ・現在の3年生はまさにコロナ禍により、以前のような学校生活を送ることができなかった。私たちが行っている地域におけるボランティア活動についても、高齢者を中心に集団での活動に消極的になり、活動が低調になってしまった。地域も学校も結びつきが大切である。コロナ禍においても何かできることはあるはず。新しいやり方を模索することが大切である。
- ・生徒の半数以上が大学や専門学校などへ進学している。普通科の学校とはカリキュラムも学びの内容も異なるが、入試のあり方も変化しており、農業高校らしい進学指導の体制を構築してほしい。また、地域活動への参加だけでなく、普通科高校との連携も生徒には刺激があるのではないかと。今後も学びの場の提供をサポートしたい。
- ・しっかりと学校の現状をとらえたものであり、しっかり自己評価がなされている。
- ・今後、新型コロナウイルス感染症に関わる様々な制限が緩和に向かうなかで、農業高校ならではの外部との交流を進めてほしい。
- ・本年度から1年生において学習成果の発表を行うということだが、視野を広げ、自らの考えを深化する機会として大切である。